

冥土†エスコート

著・蒲生竜哉
画・GIMLET205



想実堂

試し読み

目次

第1話	レイド……………	1
第2話	ソード・プレイ……………	12
第3話	アリス……………	38
第4話	コーディネーター……………	78
第5話	リクルーター……………	102
第6話	チルドレン……………	128
第7話	フライ・キャッチャー……………	162
第8話	マン・ハント……………	190
第9話	デュエル……………	216
最終話	冥土・エスコート……………	244

第1話 レイド

1

わたしの名前はアリス、黒川アリス。漢字で書くとは柄なんだけど、面倒くさいのもっぱらカタカナで通している。

仕事は冥土・エスコート。黒いメイド服に身を包み、亡くなった方をちゃんと天国にお連れするのがわたしの仕事。あれよあれよと言う間に、なんとなく成り行きでそうなっちゃった。

みんなは、死後の世界があるってわたしが言ったらどう思う？

気が狂ってる？ それとも残念な人？

そうね。確かに変なことを言っているかも知れない。

でもね、本当に死後の世界は存在するの。

わたしの今回のお仕事は交通事故で亡くなった五人の子供たちを無事に天国にお送りすること。

子供たちを連れてカロンの船着場まで二日かけて徒歩で向かう。途中、死者の街で一泊。前から目をつけていたとある空家に子供たちと宿泊する。

わたしは囲炉裏の淡い光に照らされながら、隣の寝所で寝ている子供たちをぼんやりと眺めていた。

拓海くん、結菜ちゃん、光ちゃん、大和くん、樹くん。

「あーあ、たっくん、そんなにはだけちゃって

……」

盛大に布団からはみ出しているたっくんを布団の中に戻し、上掛けを掛け直してあげる。

この子達を見ていると、どうしても自分の境遇とこの子たちの境遇を重ねてしまう。

この子達は交通事故で亡くなった。わたしは交通事故でママを亡くした。

そしてわたしもママと一緒に一度死んだから。

それはわたしが十歳の時の夏休みのある日のこと。

その日、わたしはママと一緒に成城にお買い物に出かけていた。

成城はわたしにとって特別な場所だ。

うちから一番近い大きな街だったし、何しろ

おしゃれ。格好いい大学生の人も沢山歩いている。

お買い物物の帰りに食べるケーキも美味しい。

なんとなくウキウキとした気持ちで弾むように歩きながら、ママと一緒に小田急線の改札に切符を通す。

今日のお目当てはわたしの夏向けのワンピース、それにママのお財布。

わたしはしっかりとママの左手を握っていた。

ママはいつもわたしと歩くときは車道側を歩く。その方が安全だって。

わたしは一人っ子だったから、甘やかされに甘やかされて育ってきた。

もちろんただの猫可愛がりではない。いけないことはいけないことと、叱られる時もある。

ママはお行儀には厳しかったから、食事のマナ

ーとかでは良く叱られた。

でも、基本的にわたしはいつもママと一緒に。

学校に行っていない時はいつもママとおしゃべりしていた。

「アリス、何色のワンピースにしようか？」

と言うママの問いにわたしは

「白がいい！」

と即答した。

白いワンピースってなんか素敵。

「じゃあ、その路地のお店を見てみましょう？」

アリスが気に入るワンピースがあるといいわね」

と、その時、突然周囲が騒然とした。

思わずそっちの方を二人で見る。

わたしたちの目に映ったのは、車線を跨いで

こちらにまっすぐに暴走してくる青いトラックだった。

運転している人の目が虚ろだ。こちらを向いているのに、こちらを見ていない。

「危ない、アリス！」

とっさにママがわたしのことを抱き上げる。

だが、一瞬遅かった。

トラックはガードレールを粉砕しながら歩道に飛び込むと、わたしたちの身体を跳ね飛ばした。

ボールのようにわたしたちの身体が歩道に転がる。

トラックはそのままさらに暴走し、わたしたちの身体を銀行のビルに叩きつけた。

トラックがぶつかる前に、ママが背中を丸くしてわたしに覆い被さってくれたことは覚えて

いる。
トラックがビルとぶつかる猛烈な騒音。
次の瞬間、何か途轍もなく重いものがわたし

たちの身体にのしかかってきた……

……

……

燃え尽きた薪が、ガサツ、と小さな音を立てて崩れ落ちる。

と、その時。

わたしは家の外から何者かの視線を感じて思わず緊張した。

だが、身じろぎはしない。

こちらが気付いていることを気取られてはならない。

目を瞑^とじたまま気配を消し、じっとわたしは五感に集中した。

誰かが、家の周りをゆっくりと回っている。

数歩動いては立ち止まり、気配が消えたところでまた数歩。

慣れている。

相手は、手練れだ。

わたしは音がしないようゆっくりと鯉口を切ると、静かに愛刀の『西瓜割』を鞘から抜いた。片膝を立て、両手について滑るように移動する。

引きずるスカートの衣擦れの音すら気に障る。

一歩、また一歩。

黒いメイド服はこんな時はとても便利だ。影から影へと移動できる。

子供たちのいる寢所と居間の間を通る時は緊張した。

今、もろとも襲われるのが一番危ない。

わたしは充分に時間をかけ、壁の向こう側の敵に気取られないように気をつけながら囲炉裏を回り込んで鎧戸の下まで移動した。

低い姿勢のまま、囲炉裏を背にして壁際へ。

壁一枚を隔てた向こう側には敵がいる。

裏庭にかすかに相手の気配を感じる。

どうやら、鎧戸の隙間から中を覗き込もうとしているようだ。

わたしは峰を下に『西瓜割』を構えると、静かに切っ先を壁に当てた。

刀の峰に左手を添えて『西瓜割』を壁際に固

定、そのまま静止して自分の気配を消す。

再び、壁の向こう側の誰かが身じろぎをした。

今！

「フッ！」

一気に柄まで『西瓜割』を叩き込む。

渾身の一撃。

ドンッ！

「ぐッ」

押し殺した苦痛の声。

残念、逸らした。

心臓を狙ったのだが、心臓には当たらなかったようだ。

だが、身体は貫通している。かなりの深手を
負わせたはずだ。

ズリ……と『西瓜割』を壁から引き抜く。
暗い中、刀身を走る赤いルーン文字が血に飢
えたかのように光り輝く。

ドシッ！

全体重を乗せ、すかさずもう一撃。
だが、二撃目には手応えがない。

すでに敵の気配は消えていた。
(逃げた？)

『西瓜割』を片手に、急いで裏庭に出て痕跡
を辿る。

壁に空いた二つの穴から囲炉裏の光が漏れて
いる。

そこに血痕は残っていなかった。

自分で拭ったのか、あるいは浅かったのか。

(わたしもまだダメね)

あれは必殺の間合いだった。

あれで倒せないようではまだまだだ。

わたしは右手に『西瓜割』をぶら下げたまま
居間に戻ると、本格的な不寝番に戻った。

2

この子達が亡くなった事故。
あの事故は酷かった。

集団登校中のヒヨコみたいな小学生たちの列に軽トラックが飛び込んだのだ。

三人が即死、二人は入院後に死亡した。残った七人も全員重傷だ。

拓海くん、結菜ちゃんが小学校一年生。光ちゃん、大和くんは二年生。

亡くなった五人を天国にちゃんとお連れする。それが遺族のご意思だ。そのために五百万もお金を集め、わたしにエスコートを依頼した。

冥界にダイブしてすぐに、子供たちは見つかった。

問題はその後だ。

子供たちのいたお師様のお屋敷からカロンの船着場までは大人の足でも丸一日かかる。子供を連れて一日で着くのは無理だろう。

仕方がないのでわたしは途中にある死者の街

で一泊することにした。

手頃な空き家に子供たちと一緒に一泊する。熟考した上で、場所は街の中心の角の空き家にした。あの家は用心がいい。

もしあの事故がリクルーターによるものなのだとしたら、この子達は狙われる。

何としてもこの子達を守らないといけない。そう思って警戒していたのだが、わたしの勘はどうやら当たったようだった。

早速襲われた。

このタイミングでの襲撃。

監視されているとしか思えない。

オレンジ色の燐火おきびが囲炉裏の中でゆらゆらと揺れる。

遠くで犬が吠える声、誰かの話し声、虫の音。

眠ってしまわないように気を張りながら、いつまでもわたしは子供たちの寝顔を見つめ続けていた。

静かに夜が更けていく。

五感を張り巡らしたまま、いつの間にかわたしの意識は再び過去に浮遊していた。

.....

.....

気がついた時、わたしはどこかの河原の石の上に座っていた。

「ママ？」

周囲を見回してみる。

一緒にいたはずなのに、ママの姿はどこにも見えなかった。

天気は曇天。

周りでは見知らぬ子供たちが遊んでいる。

「ママー！」

もう一回ママを呼んでみる。

だが、ママからの返事はなかった。

周囲を歩き回り、ママの姿を探す。でも、ここにいるのは子供ばかり。

子供たちが追いかけっこをしたり、石を積んだりして遊んでいる。

「ママー、どこにいるの？」

河原を走り回り、わたしはいつまでもママを探し続けた。

ママの姿はどこにもない。

もうどれだけ探しただろう。

日が傾き始めている。

薄暗くなってきた河原の石に座り込み、困り

果てたわたしは一人でしくしくと泣きだした。

「ママ、ママ、どこ？」

流した涙が新たな涙を呼ぶ。

気づいた時には大声を出して泣いていた。

「ママーッ」

と不意に、わたしは後ろから頭を撫でられてハッとした。

「童、何を泣いておる」

白髪のおじいさんがわたしの後ろに立っている。

背筋はしゃんとしているが、背は低い。百五十センチくらいしかないんじゃないかしら。

白い髪をポニーテールみたいに高い位置で結ったその姿は、でも不思議な迫力を帯びていた。力が漲みなぎっている、そんな感じ。顔立ちかおたちは優しいが、眼光にも力がある。

「どうした？ 何をそんなに泣いておる？」

「ママが、いないの」

涙でぐちゃぐちゃになりながらわたしはおじいさんに答えた。

「そうか、それは困ったのう……」

顎に手をやって考え込む。

「そうは言ってもそこですべてでも泣いておる訳にもいかんじゃろう。どうじゃ？ 行く宛あたてがないなら、うちに来るか？ ん？」

変な人について行つてはいけないといつもママには言われていた。

でも今はそのママもこの場にはいない。

このまま、この河原にいるのもとっても怖い。

「うん」

そうしたわけで、その日わたしはそのおじいさんのお家に行くことにした。

「よしよし、ではおいで」

おじいさんがグジグジと涙を拭くわたしの手を引いてくれる。

こうしてわたしは、そのおじいさんの家に身を寄せることになった。

.....

（そうだ、そうやってわたしはお師様に会ったんだ。本当にこの子達と同じ）

こうして出会ったお師様は、それなりの有名な人だった。大昔にどっかの島で決闘して、船の櫂かいを削って作った木刀で額をカチ割られてあえなく撲殺されたらしい。

冥界には奇妙なルールがある。

冥界の住人は現世の人たちから忘れられてしまふと、やがて消滅してしまうのだ。

だが、お師様の場合は何度も小説に書かれたり、映画になったりしているおかげで忘れられることがない。

そのためお師様は消滅することもなく、今でもここにいる。

お師様は優しい人だ。お師様の家にはわたしの他にも何人かの子供が身を寄せていた。お師様の話では、河原で迷っている子供を見かけるたびにこうして保護しているのだという。

「子供が泣いているのを見るのは忍びないのでな。それに、辛い目に会うことがわかってるのに放っておくのはもっと我慢がならん」
お師様はわたしに言った。

お屋敷はかなり、大きい。

塀に囲まれた武家造りの屋敷の大きな庭には、笹や名の知れない植物が綺麗に植えられていた。庭には敷石が置かれ、剣を振るうには十分な広さがあった。

この大きなお屋敷で、あるものは剣術の指南を受け、あるいはただそこにいる。

お師様は機会があれば子供達を集めて周囲の地図を示し、行くべき先を教えてください。それぞれの子供に合った道を示してくれる、そんな人だ。

そして、わたしの場合は剣術だった。

「主はいずれ元来たところに戻るじゃろ。目を見ればわかる。主は、どうやら昏睡しているだけのようにゃ」

縁側に座らせたわたしの手足を手桶と手ぬぐ

いで洗ってくれながら、お師様はわたしに優しく言った。

「それまで、剣術でもやってみるか。……ちょっと手を見せてもらん？」

「うん」

わたしは素直に右手を差し出した。

「うむ……うむ。次は足を見せてもらん」

わたしは靴を脱いだ左足をひざまづいたお師様に差し出した。

同じように、揉むような手つきでわたしの足を丹念に調べる。

「主は、背が高くなりそうだの。六尺には届かないだろうが、それくらいにはなりそうだ。これは面白い女剣士になりそうだわい」

こうして、わたしは剣士への第一歩を踏み出した。

剣術の修行は楽しかった。

「それ、ほれ、もっと打ち込んでおいで」
長い木刀を構えたお師様がわたしをけしかける。

「えい、えい、やー」

脇腹、頭、手首、足首。

一生懸命打ち込んでいるのに、長い木刀で全部いなされてしまう。

やがてこちらの力が尽きた。

「……はあ、はあ」

肩で息をするわたしの胸をお師様が軽く木刀

で小突く。

「ほれ、これで主は死んでもうた。もっとこう、楽に打ち込む方法を考えてごらん。刀の重さを使ってみい。刀の行きたい方向に力を使えばもっと楽に打ち込めるはずじゃ。刀に逆らってはいかん……そもそもじゃ」

お師様はわたしの顎おでこに木刀の切っ先を当ててわたしを上向かせた。

「その、えい、やら、やー、やらという気合はどうしたものかな」

「……ダメ、なの？」

「駄目とは言わんが、力が入ると思えん。声なんて出さなくてもいい。気合は勝手に口元から漏れる。……見ておれ」

お師様は木刀を正眼せいがんに構えた。

にわかに顔つきが険しくなる。

お師様はゆっくりと木刀を頭上に振り上げる

と、一気に振り下ろした。

「フンッ」

そのまま、沈めた身体を伸ばすようにして振り下ろした木刀を下から斬り上げる。

ブンッ

お師様の剣圧がわたしの左右を駆け抜ける。

頬が切れそうな剣圧。

衝撃波はそのまま地面を走ると、背後の茂みの笹の葉をかすかに揺らした。

「腹に力を入れるのじゃ。臍下丹田、主のへその下に力を込めて振り下ろす。本当に力がこもっていたら声を出す余裕なんてないはずじゃよ。

……さあ、もう一回やってごらん」

「今日は居合をやってみようかの」

お師様は縁側にあぐらをかくと、いつものように木刀を構えたわたしに言った。

「有栖、その木刀を腰の帯に差し込んでごらん」

「こ、こう？」

「そう。そして腰を落とす。両足は大きく開く。左手を添えて、右手はしっかりと木刀を握る」

お師様は縁側に座ったまま、竹の杖で指示してわたしの姿勢を少し直した。

「抜刀一閃。居合に二の太刀はない。だからこの一刀にすべてを乗せる」

縁側で刀を抜く仕草をしてみせる。

左手を引いて鯉口を切り、抜いた刀を下から斬り上げる。

「この一刀が重要じゃ。斬り上げた刀でもう一

太刀浴びせることもできようが、初太刀を躲かわされたら当たりはせん。さ、やってごらん」

「う、うん」

両足を開き、腰を落としたまま正面を睨む。

「フンッ」

抜いた木刀が頭上で泳ぎ、かろうじて振り下ろした二の太刀はへれへれと地面を叩くに留まった。

「まあ、最初はそんなものかも知れんのう。これからしばらくはいつもの鍛錬たんれん以外にこの鍛錬も毎日するように。そのの——と、お師様はわたしの正面の笹の茂みを杖で示した——「葉が動くようになるまで毎日鍛錬しなさい。葉が動くようになったらまた見てやろう」

2

あれから、一体どれくらいの時が経ったのだろう。

笹の葉が動くようになった時、わたしの背は大幅高くなっていた。

最初に貰もらった着物はつんつるてんになってしまった。新しいものをお師様に貰ったが、これも今では、少し短い。

毎日の修行のあと、わたしは河原に出てママを探し続けたが、ママはついに見つからなかった。

そのうちわたしはママのことを諦め、いつの間にかに修行に集中するようになっていた。

後になってわかったが、こちらでは現世の三

千六百倍の速度で時間が経過する。

簡単に言えば現世の一秒間がこちらでは一時間、一日は約十年間だ。

精神は肉体を超越する。

わたしの背が高くなったということは、わたしの精神がそれだけ鍛えられたということ。

そして、肉体は精神に呼応する。こちらで剣術を鍛えるうちに、向こうで昏睡している身体も勝手に鍛えられているのだ。

現実の世界では到底到達できないほどの高みに、わたしは到達しつつあった。

今では剣圧で笹の葉を揺らすのなんて簡単だ。気合を込めれば斬ることだってできる。

そしてわたしの剣技は時間が止まっているお師様の剣術にも迫りつつあった。

お師様との打ち合いも、今では単なるウォー

ミングアップにすぎない。本気で打ち合ったらどちらかが確実に怪我をする。

今ではわたしがお師様の一番弟子だ。

お師様の必殺技、『燕返し』。

燕返しは背負った『物干し竿』を振り下ろし、すかさず切り上げる二連撃だが、わたしは居合の修行と掛け合わせ、これを三連撃に昇華させた。

居合を放ち、返す刀で上から斬り込んで二連撃、そこからさらに斬り返して三連撃。

「フンッ」

女の子とは思えない気合が口元から漏れる。

放たれた剣撃は向こうの笹の葉をバラバラに切り裂いた。

「ほ、見事じゃ」

縁側でお師様が手を叩く。

「主ほどの上背がなければ成り立たん技じやいや、見事」

「恐れ入ります」

左手を木刀に添え、深く礼をする。

ふと、お師様は縁側から降りると草履ぞうりを履いた。

「有栖、ちよいと、目を見せてみい」

「は、はい」

素直にお師様の両手に顔を委ねる。

お師様は両手でわたしの頬を優しく挟むと、静かにわたしの瞳を覗き込んだ。

「……うむ、予兆が出ておる。そろそろ別れが近いようじゃ」

少し悲しそうにお師様は言った。

「これは、急がねばならん。有栖よ、明日からは『錬想れんそう』の修行に入ろうかの」

.....

『錬想』とは、自分の勁けいと地脈のエネルギーを利用して、何もない空間から自分の想う何かを錬りあげ物質化する能力だ。

これは誰もが出来る訳ではない。習得するためには卓越した師匠の助けが要るし、精神の強さ、想いの質が物を云う。

「まずは、地脈の呼び出しからやってみようかのう。有栖、そこに裸足で立ってごらん」

「はい」

わたしは素直に草履ぞうりを脱ぐと、敷石の敷かれた庭の真ん中に立った。

「地脈はどこにでも走っておる。だが地脈は気まぐれでの。すぐにどこかに行ってしまう。だから、こちらから呼びかけて地脈を集めなければならん」

お師様は両手を使って説明した。

「有栖^{はせけい}、発勁^{はつせい}はもういつでも出来るじゃろ。今ここで勁^{せい}をためてごらん」

「こ、こうですか？」

わたしは音を立てて両手を合わせると臍下丹田に力を込めた。

「ウウンツ」

無意識のうちに気合が漏れる。

どんどんお腹のあたりが熱くなる。

「さあ、ここで震脚^{しんきゃく}して」

「はい」

ズンツ。

勁^{せい}を込めたまま、右足を思い切り地面に叩きつける。

……と、わたしは足の裏に何かもぞもぞするような感覚を覚えた。

何だろう、これ？

くすぐるような、何か細いものが足の裏に集まってくる。

「お、お師様？」

たまらず、わたしはお師様に声をかけた。

「な、何かがわたしの足の裏をくすぐってます。」

こ、これはミミズ？」

「続けなさい、有栖。それが、地脈じゃ」

何が嬉しいのか、お師様はニコニコと笑いながら答えて言った。

「最初から地脈を呼び出せるとはのう。有栖、主にはやはり才能がある」

もじょもじょ動く何かは、やがてわたしの足の裏を通り抜け、脚に沿って上に這い上がってきた。

「お、お師様？」

「何じゃ、有栖」

「な、何かが脚を撫でています。何か、変です」

「地脈が主の勁の熱を求めて這い上がってきたのじゃ。案ずることはない」

「で、でも」

脚から上がってきたもじょもじょは今ではお腹に充満していた。

身体が、熱い。

燃えるようだ。

それでもしばらく我慢したが、耐えきれずわたしは再度お師様に助けを求めた。

「お師様、身体が、とても熱いです。も、燃えちゃいそう」

さすがに異変に気付いたのか、ガバッとお師様が立ち上がる。

「いかんッ！」

駆け寄ってきたお師様がわたしのお腹に右手を当て、大きく深呼吸をする。

「熱ッ。有栖、しっかりせいッ」

お師様の右手から熱が逃げていく。

お師様はわたしの熱を全て吸い込むと、

「ムウンッ」

と両手を合わせた。

ドウンッ

お師様が両手を開いた瞬間、手の中で何かが爆発する。

黒い光。赤い稲妻を帯びている。

「とんでもない熱量じゃ。有栖、主は一体、何者じゃ？」

お師様の手を背中に感じて、身体から力が抜けていく。

「有栖、しっかりせいッ」

呼びかけるお師様の声を遠くに聞きながら、膝から碎けたわたしはその場で失神した。

.....

目覚めた時、お師様はわたしの枕元にあぐらを組み、頬杖を突いてうたた寝をしていた。

わたしが目を開けた瞬間、お師様も目を覚ます。

「目覚めたかえ、有栖よ」

お師様の表情は優しくかった。

「主の力量を読み違えた。すまんのだ。わたしの過ちを許しておくれ」

優しくわたしの額に手を添える。

「許すも何も、」

わたしは起き上がると、落ちてきた額の手ぬぐいを両手で受け取った。

「わたしに何が起こったのですか、お師様」

「地脈の熱量が集まりすぎたのじゃ。普通はあそこまで大きくはならん。せいぜい身体が少し

熱くなる程度なんじゃが……」

お師様が少し考え込む。

「有栖、主は特別なのかも知れぬ。あれほどの熱量はわしでも集めるのにしばらくかかる」

「特別？」

「そうじゃ。これほどの才能は見たことがない。主はとんでもない剣士になるかも知れんぞ……今宵は眠りなさい、有栖。主が寝入るまでわしが側にいてやろう」

3

翌日。

お師様は腰の帯から煙草入れを取り外すと、蓋^{ふた}についていた根付を取り外した。

ネズミの根付。象牙か何かでできているみた

い。白い根付がかすかに琥珀色に染まっている。

「有栖、これを主に託そう。この形をよく覚えるのじゃ」

「はい」

わたしはネズミの根付を受け取ると、紫色の紐のついたネズミを眺めた。

小さなネズミが抱え込んだドングリか何かを一心に齧っている。

「地熱を勁に乗せたら、臍^{せいかた}下丹田に集まった熱を手のひらに移動させて、この形に鍊^{くわ}ってごらん。何、怖いことはない。わしが見ているから大丈夫じゃ。危なくなったら熱は抜くから安心して鍊想してごらん」

「はい」

わたしはお師様を信じて再び庭で発勁すると、震脚して地熱を足元に集めた。

二度目だから何となく要領はわかる。

コントロールしながら、ゆっくりと地熱を脚からお腹へ。

集まった熱を手元に移動させる。

この熱が物質化することに関してはかなり半信半疑だったけど、お師様の言うことに間違いない。

わたしは手のひらで丸くした熱を両手で潰した。

「フンッ」

頭の中でネズミの根付の形を思い出しながら、ゆっくりと両手を開く。

バチバチと赤い火花を上げながら、黒い塊が凝集する。

やがてそれは、白いネズミの彫り物になった。だが、とても大きい。両手で抱えられるくら

い。とってもびっくり。何にもない空間からこんなものが出てくるなんて。

「ほ、でかいのう。それではとても煙草入れには付けられんわいなあ」

目を丸くしたわたしを見ながらお師様が笑う。
「それに有栖よ、紐を忘れておるぞ」

大きな白いネズミの裏側には紐を通すための穴が開いていたが、確かに紫色の紐はついていなかった。

「あ、本当だ」

「有栖、」

お師様が目を細める。

「主の力はとても強い。だが、それを制御できるようにならなければな。まずは小さいものを作るよう修行しなさい。このネズミを作るようになったら、わしのネズミは主に授けよう」

それからは毎日『鍊想』の修行だった。

ネズミの根付を小さく作る自信はなかったから、簡単なものから作ることにした。最初は草履。形をよく覚えて、構造も理解できていないと変なものができてしまう。

なんとか草履を作れるようになったところで今度は着物。着物が作れるようになったら今度は袴^{はかま}。帯、下緒、なんでも手当たり次第に作ってみた。

帯や下緒は簡単だ。糸が編みこまれるさまをイメージして、頭の中で編んでいけば勝手にできる。着物は最初から反物をイメージして、これを縫い合わせて作る。

正確にイメージできれば、どんなものでも作ることが出来る。

でも、複雑なものは作れない。

お師様の居間には大きな柱時計があるのだけ

れど、これはどうやっても作れなかった。

「そりゃそうじゃ、有栖」

お師様が笑う。

「これは時計職人が鍊想したものじゃ。中の構造を完全に理解していなければ到底作れん。これは、主には無理じゃよ。わしにも無理じゃ」

毎晩、修行の最後には必ずネズミを作るのだが、小さく作るのは難しかった。

どうやっても大きくなってしまう。

「熱が大きすぎるようじゃのう」

大きなネズミを囲炉裏の焚きつけに投げ込みながら——そうやってエネルギーは地脈に戻すものらしい——お師様がため息をつく。

「熱が足りなくて練るといふ修行は幾度となくやってきたが、熱が多すぎて制御できないとい

うことは初めてじゃ。さあて、どうしたものか」

う。
「有栖、主には絶対に殺したい相手がいるのかえ？」

もう一つ、作れないものがあつた。

「います。わたしをここに落とした人。交通事故故を起こした人」

それは、刀。

「ならば、其の者を殺すために錬想するのじゃ。殺意がなければ武器は作れん。……じゃが、今日は遅い。さ、有栖、ネズミを作ってごらん」

お師様は自分の刀、『物干し竿』を大切そうに床の間に飾っていたが、これはどうしても同じものが作れない。

その日、わたしは朝早くから刀の錬想に取りかかった。

「ははは、刀の錬想は少々勝手が違うからの。そう簡単にはいかんぞ」

わたしに瀕死の重傷を負わせた人。ママと一緒にわたしを轢いた人。

うまくいかないかと相談したら、お師様は楽しそうに笑って言った。

顔はちゃんと覚えている。

「刀の錬想には殺意が必要じゃ」

あの顔は、絶対に酔っ払っていた。虚ろな瞳を覚える。

キセルの灰を炉端に落としながらお師様が言

歩道に乗り上げてきた青いトラックはわたし

たちを跳ね飛ばすと、そのままわたしたちの身体をビルの壁に叩きつけた。

そのあとわたしはここに来ちゃったから判らないけど、きっとママは死んだと思う。

最後の瞬間にママはわたしを庇^{かば}って身体の上に覆いかぶさった。

あれだけ探しても見つからなかったのだ。ママはきつとすぐにカロンの船着場に行っちゃった、そんな気がする。

殺意を練り上げ、そこに勁を乗せる。

あいつは、絶対に許さない。

ズタズタの細切れになるまで斬り刻む。

バラバラになって、地獄の苦しみを味わうまで斬ってやる。

殺意がわたしの瞳に宿る。

わたしの背中から、殺意が湯気のように立ち

上る。

ドンッ、ドンッ

踵で地脈を起こし、さらに震脚する。

ズズズズズ……

周り中から地脈の熱が集まってくる。

わたしは臍下丹田に集まった熱を両手のひらに集めると、その圧力をものともせず、無理やりエネルギーを小さく折り畳んだ。

畳んだエネルギーを一度広げ、それを再び折り畳むという作業を繰り返す。

殺意が地熱にさらなるエネルギーを与える。

触れなくなるほど熱くなった地熱を手のひら

に込め、わたしはゆっくりと両腕を開いていった。

ズオーツ

なんとも言えない虚脱感^{きょだつ}とともに、手のひらの間に刀が現れる。

殺意が切れないように注意しながら、わたしはさらに両手の間に力を込めた。

肩に強い負担がかかる。

両腕が重い。

気がついた時、わたしの右手には長く、黒い刀が握られていた。

黒い刀身には読めないルーン文字が赤く輝いている。

読めないはずのルーン文字。だが、その意味は頭に勝手に響いてきた。

『死者に久遠^{くおん}の平穩を』

ルーン文字が勝手にわたしに話しかけてくる。

「……死者に、久遠の平穩を？」

「ほ、もうここまで来たか」

いつの間に起き出してきたのか、お茶を啜^{すす}りながらお師様が言う。

「しかし、長い刀だのう。しかも直刀とはなあ」

お師様は再びお茶を啜った。

「有栖よ、その面妖な文字はなんじゃ」

「わかりません。でも、……『死者に久遠の平穩』と書いてあるようです」

頭に響いてきた言葉をそのままお師様に伝える。

「なるほどの」

お師様は深く頷いた。うなず

「有栖、今一度ネズミを作ってごらん」

突拍子もないことを言う。

だが、お師様の言うことに間違いはない。

「はい」

もう一度発勁して地熱を集める。

いつもとは違う感覚。今度は地脈が暴れる感覚がない。

穏やかな感覚で、わたしはネズミの根付を錬想した。

出来るだけ小さく。紐もちゃんと連想して。

小さな黒い炎の中から手のひらにぽとりと落ちた根付は小さく、ちゃんと紫色の紐が付いていた。

「身についたようじゃのう、有栖。その刀と根付を見せてごらん？」

「はい」

わたしは根付と刀をお師様に差し出した。

「……うむ、良く出来ておる。この刀には銘めいがあるな。『西瓜割すいかわり』はどうか？ スイカを斬る包丁にはちょうどよさそうじゃ。西瓜の鐔つばでもつけたらどうじゃえ？」

4

それからしばらくの間は毎日『西瓜割』を錬想した。

反復しなければ身につかないし、これがなければどうにもならない。何しろこれがわたしのライフラインなのだ。

いつか、ママを殺したあいつを切り刻むため。いつか、ママの仇を討ち取るため。

『西瓜割』を錬想するための「殺意」。

わたしの殺意を思い出した時、何もかもが繋がった気がした。

なぜ、わたしがここに迷い込んだのも。

なぜ、わたしがカロンの船着場へ向かわなかったのも。

そしてなぜ、わたしがお師様に拾われて剣士になったのも。

全ては単なる予定調和、そんな気がする。

『西瓜割』を作れるようになってからは、さらに剣術の修行にも熱が入った。

何しろ『西瓜割』は重い。材質が何なのかは

お師様も判らないとおっしゃっていたが（見たこともない金属だそうだ）、四尺の黒い直刀はとんでもなく重かった。

それまで使っていた木刀を捨て、わたしは新たに練習用の木刀を錬想した。長さは同じ、四尺。ただ、刀身を太く作って重さを『西瓜割』よりも少しだけ重くした。

この重い木刀を簡単に振れるようにならないと、到底『西瓜割』は使いこなせない。

「フンッ」

以前にも増して腰を入れ、丹田に力を込めて振り下ろす。

これを毎日三千回。その他に居合の打ち込みを千回、新しい木刀を使ったお師様との乱取りを日が暮れるまで。

乱取りをする時、子供たちはいつも庭の外で遊ばせていた。

そばにいと危ない。巻き込んでしまったら撲殺してしまう。

「嫌な形の木刀じゃのう」

最初にわたしの新しい木刀を見たとき、お師様は眉をひそめた。

「わしの最後の決闘を思い出す。奴もそんな無骨な木刀を構えておったよ」

まあ良い、とそれでもお師様はわたしの乱取りに付き合ってくれた。

こちらの木刀が重いから、今度はお師様の長い木刀が押し負ける。

勢い、お師様も本気にならざるを得ない。

「キエイッ」

「ムウンッ」

本当の殺し合いのような気合が二人の口元から漏れる。

何しろ木刀だ。下手をすれば骨折する。

達人のお師様と剛剣を振るうわたしとの乱取りは、撃ち込む剣撃を紙一重で躲し躲される、文字通りの死合の様相を呈してきていた。

そんなある日のこと。

「主との乱取りはほんに骨が折れるわい。いずれ本当に骨を砕かれそうじゃ」

乱取り稽古が終わるといつものようにお師様は縁側に腰を下ろし、上半身はただけで夜風に吹かれながら美味しそうに煙草をふかした。

キセルで縁側を叩き、中身を捨てる。

お師様の肌はピンと張って、下には筋肉が漲みなぎっていた。贅肉はかけらもない。まるで若者の身体のようなのだ。

次の煙草をキセルに親指で詰めながら、お師様はしみじみとわたしに言った。

「有栖よ、精進したのう。あとしばらくでおそらく主はわしから一本取るようになるじゃろう」

「まさか」

お世辞かと思つて笑う。

「真面目に聞きなさい、有栖。主はわしが今まで見てきた弟子の中でも頭ひとつ抜きん出ている。もうわしが教えられることはそう多くはない。だが有栖よ、これからが肝心じゃ」

「……………」

いつになくしんみりとお師様は話し続けた。

「いずれわしでも主には敵わなくなる。これは確信じゃ。いつか、必ずそんな日が来る……」

そうした時、主が目標を見失ひはせんか、それが心配での中」

「わたしは、お師様の弟子です。これからもずっと、いつまでもわたしはお師様の弟子です」
見捨てられちゃうのかと思つてわたしはお師様に思わず縋すがり付いた。

「それは、かまわん。それに、もちろんじゃ」
嬉しそうに笑う。

「だが追いかけて続けたきた者に追いついた時、得てして人は目標を見失つてしまうものなんじゃ。有栖よ、だがそこらが肝要じゃぞ。そこで立ち止まつてはいかん」

「はい」

「目標を見失つたら、そこからは自分を目標にしなさい。今日よりも明日、明日よりも明後日。毎日精進せい。さすれば、目標を見失うこともなからうよ……よつこらせつと」

と、お師様は立ち上がると、

「わしはちと汗を流してくる。主は鍊想の修行を続けなさい」

言いながらはだけた着物を元に戻した。

「はい」

素直に頷く。

「有栖、……精進せい」

お師様は目を細めてわたしに言った。

お師様が縁側の先のお風呂場に行ってしまった後、わたしはその場でしばらく考えていた。

お師様はなんでこんなことを急に言い出したんだろう。

なんか弱気になっちゃったのかしら？

わたしは長い髪をお師様と同じように高い位置で結った頭を振って考えを切り替えると、庭

に降りていつものように鍊想を始めた。

殺意を込めながら臍下丹田に勁を貯め、踵で地面を叩いて地脈を起こす。

勁を練って強く震脚。地熱を臍下丹田に集め、殺意を乗せながら両手の間で折りたたむ。

何度か折りたたんで鍊った想を押しつぶし、念を込める。

想を開くとき、両手を回すと念が竊ることは経験で知った。

合わせた両手の右手を下に捻り、想を強めながら両手を開く。

ズォー……

いつもの妙な虚脱感と共に『西瓜割』が現れた。

長さ四尺。重さも二キロくらいはあると思う。

不思議なことに、『西瓜割』はいつも必ず同じ重さ、大きさで現れる。

一度違う形に鍊想しようとして頑張ってみたんだけど、何度試しても『西瓜割』は形も大きさも変わらなかった。

違うのは刃の鋭さだけ。

気が乗っている時は鋭利な刃が、どこか気が緩んでいる時には緩んだ刃付けの『西瓜割』が現れる。

「さて」

わたしは巻藁まきわらを持ってくると、それを丸太の上に乗せた。

『西瓜割』を帯に挿し、下緒を締めて固定する。巻藁の前に立ち、居合の姿勢で腰を低く構える。

「チェイッ」

抜刀一閃。

巻藁はしばらくそのままの形で丸太の上に乗っていたが、やがて上半分がズルズルと滑りだすと真っ二つに切れた。

「うん」

今日の『西瓜割』はいい出来だ。しばらくはこれを使おう。

そのあとネズミを二十四くらい作ってから、わたしは今日の稽古を切り上げて囲炉裏端に上がった。

珍しく、お師様がお酒を飲んでいる。

もう子供たちは居室に戻ってしまったようだ。今は五人ほどの子供たちがお師様の元に身を寄せていたが、彼らは大人と関わることはあま

りせず、好き勝手に遊んでいた。

お師様は囲炉裏にかけた鍋の中からお銚子を一つ摘み出すと、小さなぐい呑みにそっとお酒を注いだ。

「酒を錬想するのは大変だったんじゃ」

わたしの視線に気づいたのか、お師様が口を開く。

「何しろ中の液体と外の入れ物を同時に錬想せねばならん。できるかな？ 有栖」

「できるも何も、わたしはお酒の作り方を知りません。飲んだこともないですし。知らなければ錬想はちょっと……」

「うむ、まだわたしにもお主に教えることがあったか。有栖、飲むか？」

「いえ、まだわたしにお酒は早うございます」

「つまらん奴じやのう」

お師様はぐいとお酒をあおった。

「最初に作った酒は酢のような味じゃった。そのあとも砂糖水やら味醂やら、妙なもののばかりが出来てのう。ようやく最近になって満足のいくものを錬想できるようになったよ」

「それよりもお師様、今日のネズミです」

わたしは両手いっぱいネズミの根付をお師様に差し出した。

「うむ」

ぐい呑みを傍らに置くと、わたしの作った

ネズミを一つ一つ、丁寧に調べ始めた。

「……ようできとる。大きさも揃うようになったのう。紐もちゃんと錬想できとる。これならもう何でも作れそうじゃ」

「ぐい呑みでも作りますか？ ぐい呑みならわたしでも錬想できます」

ふと思いついてわたしはお師様に提案した。

「ほう、面白いの。今ここでできるかな？」

「はい、多分」

あの程度の大きさのものなら震脚して地脈を呼び出すまでもない。

わたしは勁を練ると少しだけ地脈の熱を借り、その場で両手をパチンと合わせた。

ぐいっと開いた両手の間で小さく黒い光が凝集する。

ぐい呑みの胴は白く、縁には黒い線を入れた。

「どうぞ」

わたしは左手に乗せたぐい呑みに右手を添えてお師様に差し出した。

「ほ。皮鯨を錬想するとは」

お師様が驚いた顔をする。

「皮鯨とは何ですか？」

「知らんで作ったのか。有栖、お前という奴は……」

呆れ顔で、それでも矯めつ眇めつぐい呑みを調べている。

「よう出来とる。有栖、皮鯨とはこの文様のことよ。唐津焼の意匠じゃ」

「どこかで見たことがあったのかも知れませんが、では、早速」

お師様は今作ったばかりのぐい呑みにお酒を注ぐと、旨そうに一息に飲み干した。

「……うむ、旨い。これはありがたく頂いておこう」

お師様は袂から手ぬぐいを取り出すと歯を立てて少し切り取り、裂を作った。

裂で大切そうに皮鯨のぐい呑みを包み、袂にしまってしまう。

「もう、使わないのですか？」

「これは大切に使うことにするよ。何しろ有栖の初ぐい呑みじゃからのう。勿体ない」

どうやらお師様は少し酔っ払っているようだった。

頬が赤い。

「おお、そうじゃ」

不意に思い出したように言うと、お師様は右腰の帯に挟んでいた煙草入れを取り出した。

蓋についている根付の紐を丁寧に解いてネズミを煙草入れから外す。

お師様は、

「ほれ、これはもう主のものじゃ」

とネズミをわたしの手の上に乗せた。

「頂いて、よろしいのですか？」

見るからに高級そうな根付だ。最初に見た時

も思ったけど、象牙か何かでできているみたい

「ぐい呑みのお礼じゃ。それに、ネズミをちゃんと鍊想できるようになったらやると言っていたしの」

「ありがとうございます。大切にします」

わたしは頂いたネズミの根付を大切に懷にしまった。

そのあと他愛のない話やお師様の武勇伝をしばらく聞いたりしていたが、やがて眠くなってきたのか、お師様は肘枕をして囲炉裏端に横になってしまった。

「うむ、少し飲みすぎたかも知れん。有栖、すまぬが上掛けを持ってきておくれ」

「はい」

わたしはお師様の部屋に入り、押入れから上掛けを取り出した。

上掛けを持って囲炉裏端に戻った時、すでにお師様はいびきをかいて寝入っていた。

「しょうがないなあ」

お師様に上掛けをかけてあげる。

囲炉裏に近すぎると燃えてしまうかも知れないので少しお師様の身体を動かしたのだが、それでもお師様は起きなかった。

「わたしも寝よう」

傍らに置いた『西瓜割』を掴み、自室へ戻る。布団に入ってから、わたしは頂いたネズミを眺めてみた。

可愛い顔をしている。一心にドングリを齧っている。わたしが鍊想するネズミよりも少し可愛いがする。

「今日より明日、明日よりも明後日、か」

布団から少しにじり出て、枕元の行灯の灯りを消す。

修行の疲れもあつてか、夜の薄明かりの中、ネズミを見ながらお師様の言葉を反芻はんそうしているうちに、わたしもすぐに深い眠りに吸い込まれていった。

（あれ？ これは、どこ？）

目覚めた時、見えた天井はいつもの見慣れた木の天井ではなかった。

白い天井。

天井が明るく光っている。

（あれ？ あれ？）

いつもよりも身体が小さい。しかも身体が痛い。

「うわああッ」

びっくりして飛び起きた。

身体中に管が刺さっている。

パニックを起こしたわたしは身体中から管を引き抜いた。

だが、びっくりしたのはわたしだけではなかったようだ。

同じ部屋に控えていた看護婦さんが座っていた椅子から飛び起きる。

彼女は走って部屋の隅のボタンを押すと慌てた様子で話しかけた。

「に、二〇三号室の患者さんが意識を取り戻しました。早く、ドクターを呼んで！」

本を作ろう、本で読もう



teapot-novels.com

《 続きは書籍でお楽しみください